『部落解放研究』広島部落解放研究所 3: 56-77 1997.10 査読有

近代と都市部落―広島市Ａ町を事例として

＜１＞都市部落研究の視座

今、近代日本の都市研究が増えている。ポスト近代と称される今日、近代の意味が問われ、解体され、再構築されつつある。都市が脱工業化し、世界都市化するなか、都市の自己史が洗われている。都市は近代の光と影をいかにして継承し、また払拭しつつあるのか。

近代都市の研究の焦点（の一つ）は、都市下層の生成と展開の解明にある。実際、近代都市の主役は、階層・空間としての都市下層であった。ここで都市下層とは、たんに都市の底辺一般を意味しない。それは、近代都市にあって「収奪」と「被差別」が同時に課せられた階層・空間としての、固有の歴史的範疇である(1)。ではその都市下層は、いかなる意味で近代都市の所産なのか。それは、いかなる軌跡を経て今日に至ったのか。

近代の都市部落の研究もまた、すでに少なくない。前近代を起源とする部落差別がいかに再定義され、活性化し、近代都市の基底に構造的に組み込まれていったのか。じつに都市部落の研究は、都市下層の生成と展開の解明の鍵（の一つ）をなす。

中川は、東京を事例に、近代の都市下層の生活構造を分析した[中川清,1985]。そして都市下層が「貧民」（貧民窟）から「細民」（細民地区）へ、さらに「要保護世帯」へ抽象化し、中流化のなかで不可視化していく過程をあきらかにした。しかしそこで、この抽象化・中流化の全般的過程のなか、「被差別」存在として都市底辺に凝離して今日に至る被差別部落民・在日韓国朝鮮人（以下、韓国朝鮮人）・日雇労働者・野宿者等（の集住地区）にみる近代都市の二重構造の分析という課題が残された。

杉原等は、大正期の大阪を事例に、日雇労働者、被差別部落民、韓国朝鮮人等の労働＝生活過程を分析した[杉原薫・玉井金五,1986]。そして「スラム労働力市場」として大阪の商工業化の推力をなしていった被差別民衆の姿をあきらかにした。そのなかで、福原は都市部落住民の被差別労働市場および被差別地区の膨張の動態をあきらかにした[福原宏幸,1986,pp.95-159]。しかしそこで、近代都市の被差別構造が今日のそれの原型として継続/断絶していく過程の分析という課題が残された。

近代の都市下層の研究はこの他、社会学・歴史学・文学等の領域からのもの等、枚挙に暇(ｲﾄﾏ)がない。それらはおおむね、近代都市の不可視の断面を暴き、今日の都市下層に連続/断絶する史的原型を模索し、以て近代が胎む自己撞着的な多面性を描く営みとしてあった。

近代の都市部落の研究もまた、個別事例の実態調査報告・モノグラフとともに、都市部落の労働・生活・文化の研究、さらに米騒動・災害・疫病等の事象をめぐる都市部落の研究と、枚挙に暇がない。それらはおおむね、都市部落の労働・生活・文化の構造を解明し、以て近代の部落差別の再定義と再生産のメカニズムを暴く営みとしてあった。その上で、近代都市の形成と展開の全体過程に被差別部落（民）の動態を位置づけ、資本の「収奪」および「被差別」という都市形成の二重原理の接合を再構築する課題が残された（[馬原鉄男,1974][大串夏身,1980][馬原,1982]他）。

本稿は、筆者が参照しえた先行研究の評価を前提に、これら残された課題を進める意図のもと、一つの事例研究を試みる。事例は、広島市の被差別部落・Ａ町である(2)。本稿の課題は次のとおりである。

1.近代広島の都市および都市下層形成にみるＡ町の位置と構造（の一断面）を解釈する。
2.Ａ町（住民）にみる「収奪」と「被差別」のメカニズム（の一断面）を解釈する。

以て「都市部落」および「都市下層」範疇の再構築の一助となす。研究の資料は、筆者が収集・参照しえた範囲のＡ町に関わる論文・文献、行政・団体資料、新聞、雑誌、住民聞き取り等からなる。それら資料の質量は、なお僅少である。

本論に入るまえに、本稿が留意する方法的な前提について注記する。

1.一般に、資料に記された歴史的事実がつねに無謬・正確とは限らない。そこに資料作成者の意図や方法のバイアスが介在するからである。ゆえに資料の引用（重引）には作成者の意図や方法の考証（資料批判）が前提となる。本稿はこの点を承知している。しかし傍証となるべき資料が少ないなか、資料の周到な考証には限度がある。

2.都市部落の人々は、なにも下層ばかりではない。資本の論理が貫くなか、人々は階層分化し、部落のなかに富裕層や中間層が現れる。ただし本稿は、都市部落の全般的な階層分析に主眼をおくものでない。ただその下層部分に関心を抱く。そして下層の人々を主役とした都市部落の史的展開の主要な特徴の抽出をめざす。この意味で、本稿は都市部落の一断面を見るにすぎない。

3.本稿は近代の都市部落の人口・就労にみる部落差別の構造分析を主題とする。その論証に必要な限り、厳しい部落差別の史実をも引証する。また本稿は、被差別の人々の差別との闘いの軌跡には直接言及できない。しかし厳しい差別があるところ、人間解放を希求する被差別の人々の闘いがある。Ａ町の場合もそうである。この人々の怒りと闘いへの共感、これが本稿の動機である。

＜２＞広島と近代

広島（市、以下同じ）は太田川の三角州に位置し、元来農地が狭小で人口が多い地域であった[有元正雄他,1983,pp.2-5]。幕末期、商業的農業と貨幣経済が浸透し、農民層分解が進んだ。小規模な地主制のもと過剰人口が生じ、それは伊豫稼ぎ・作州稼ぎとして排出された。明治期、人々は、北九州・岡山・大阪・東京等の炭鉱・紡績工場に出稼ぎに出た。さらに出稼ぎは、時代の潮流のなか、ハワイ→北米→南米→東南アジア→「満州」と海外に展開した。

19世紀初頭、広島藩の総村512の内、街道・河川筋の261村に被差別部落が配置された[橋本敬一,1986,p.66]。部落の人々は「革田身分」とされ、おもに「夜警・犯罪人追捕・牢番・刑罰執行」の仕事を担わされた[橋本敬一,1986,p.75]。この内、広島城下に東西2つの被差別部落が配置された。その西端の部落が今日のＡ町の起源に当たる。

広島は、農地狭小・人口饒多にして国内・海外へ出稼ぎを出す土地で、明治期に入ってもみるべき近代工業の発達はなかった。しかし広島には、軍事的な立地条件と過剰労働力があった。かくして広島は軍都として指定され、建設された。帝国陸軍の一師団・五連隊・運輸部・三支廠が配置された。軍事の機関・施設・事業は、資本と労働力を招いた。土木工事の人夫、（兵器・被服・糧秣）支廠の職人、軍調達の商品の製造業者や商人が、広島に集まった。

この過程でＡ町が、周辺農村・都市から流入し、また都市内で環流する下層労働力のプールとして膨張していった。

このように俯瞰される広島の地域性を背景に、また今日の広島を射程に入れ、さらに都市下層および都市部落（Ａ町）の展開を念頭に、近代の経緯を整理すると、図のようになる。図は、近代広島の都市部落研究という本稿の課題追究のための整理枠である。

図. 広島市の時期区分

	近代Ⅰ期 1867 ～1945年	近代Ⅱ期 1945 ～1978年	近代Ⅲ期 1978年～
都市の表徴	軍　都	平和都市	国際都市
都市底辺の展開	農村困窮者の流入・滞留	戦災困窮者の流入・還流	下層困窮者の流入・凝離
都市底辺への特徴的な流入	貧民窟／木賃宿	闇市／スラム／朝鮮人集落	外国人 ／寄せ場／野宿者
被差別地区	膨張・滞留	還流・再生	凝離・縮小

本稿では、明治から現在（戦後）に至る時間を「近代」と呼ぶ。その上で近代を3区分する。まず、明治維新の1867年から第二次世界大戦敗戦の1945年までを「近代Ⅰ期」と呼ぶ。近代都市の発端から大都市としての成熟に至る近代Ⅰ期は、本来、さらに下位区分されうる。次に、敗戦から通称「原爆スラム」（基町）の再開発事業の完了宣言が出された1978年までを「近代Ⅱ期」と呼ぶ。戦災都市復興の時期である。そして1978年から現在までを「近代Ⅲ期」と呼ぶ。これは、石油危機を転回点とするポスト高度経済成長期に照応する。最後にこれら3期に、都市（表記/特徴）/都市下層（人口/空間）/都市部落（就労/空間）を整理・対照させる。以下、この枠組みに準拠して、広島・都市下層・都市部落の史的展開の基本を特徴づける。

＜3＞近代Ⅰ期

[1]「軍都」「廣島」は戦前期の1889年に、面積27.0㎢、23,824世帯、83,387人であった[広島市,1995,p.18](3)。この時期、「聖戦」遂行の目的を以て軍部主導の都市計画が立てられた。道路整備、橋梁架設、上水道敷設、電車・鉄道敷設、港湾・河川埋立て等の都市改造が行われた。軍関係の施設・機関のため土地接収が行われ、接収面積は旧市域の20%に及んだ[日本中国友好協会広島支部,1990,p.3]。これらの事業は、大量の労働力を需要した。同時に、軍需関連の軽・重工業が興った。資本が集まり、労働市場が拡大した。その結果、広島は商業・教育・文化の中核都市ともなった。

[2]都市機能が集中し労働市場が拡大するにともない、周辺農村・都市の過剰人口が流入した。また数次にわたる町村合併によって、市域が拡張された。都市が産業化するにともない、階層および空間構造が分化し、都市下層が出現した。そこに農村・小都市の困窮者がスキッド（滑落）した。市内に貧民窟・木賃宿が散在した。1889年に、困窮者救済の広島市救助規則が施行された[広島市,1989,p.121]。1925年に、市立の無料宿泊所が建てられた。1924年に、警察は48軒の木賃宿（自由労働者の宿泊者延21,500人）を数え、1927年に61軒の木賃宿を数えた[広島市議会,1986,p.633,p.752](4)。3年間に13軒もの増加である。当時の新聞や雑誌は、広島の貧民窟および木賃宿の「探検」記を掲載している[中国新聞社,1913.6.14－18][広島社会事業協会,1927.2.5,pp.750-765/1928.1.1,pp.789-792/1929.1.1,pp.792-798](5)。1918年に、広島市の最困窮者は1,699人であった[芸備日日新聞社,1918.6.28]。1930年9月に、失業登録者は1,575人で、内、日本人840人、韓国朝鮮人735人であった[広島市議会,1983,p.799]。これらは行政に「認知」された数であり、実際の困窮者や失業者数はこれをはるか凌駕したであろう。

大正・昭和（初）期、河川改修、港湾埋立、鉄道敷設工事、造船・機械・製鋼・被服等の工場、荷役等に韓国朝鮮人の出稼ぎ者が入った。彼らは、市内の工事現場、工場周辺、河川敷の飯場や簡易住宅（バラック）に集住した。広島県で1920年に1,173人の韓国朝鮮人[広島市,1983,p.312](6)

を、広島市で1934年に3,442人の韓国朝鮮人[在日本大韓民国居留民団広島県地方本部,1984,p.31]、1945年に52,000人-53,000人（推定）を数えた[広島県朝鮮人被爆者協議会,1979,p.251](7)。とくに三菱重工業の工場周辺には、3,000人もの徴用労働者が集住したという[山代巴,1965,p.4]。これら韓国朝鮮人の集落も、都市下層を形成した。

[3]近代広島の都市下層の一画をなすのが、都市部落であった。その実態は（一部）貧民窟や木賃宿に重なる。大正期の『中国新聞』で、三大貧民窟の中に市東端の被差別部落とともに、A町が数えられた[中国新聞社,1913.6.14](8)。またA町の木賃宿の「探検」記が掲載された[中国新聞社,1913.6.18/19/21](9)。明治期、A町は膨張と拡大の時期であった。人口は1871年に889人だったところ、1917年に4,050人、1933年に5,693人に膨張した[ふくしま文庫,1992,p.36](10)。近代広島の労働市場の拡大とともに、周辺農村・小都市の人々が、姻戚・縁者・同郷者を頼ってA町に流入した。また広島市内の生活困窮者や韓国朝鮮人が環流した。A町「本通り」の商家や周辺農家が借家を建て、そこへ流入者が入った(11)。A町の地域空間が広がった。A町は幕藩期の「革田部落」に起源をもった。同時にA町は、周辺地域から流入した人々による近代部落でもあった。1925年、現住地に本籍を置く人口比率は、市全体（190,937人）で79.7%であった。他方A町（3,702人）は45.9%であった[広島市議会,1983,p.111]。ここでも、A町がいかに流入者の町であったかが分かる。A町は、人口移動が激しい。名前の異姓率が高く、住民の出自が容易に分からない(12)。

一応同和地区というのは、この一団なら一団がですね、どういう苗字でいやどこどこじゃろうという分かるいわれるくらいですが、ここでは絶対それが分からんです。明治以降は軍都として近代化のために各地からおいでんなった。どこも各地から来てるわいう点はあるんですけども、ここだけは孤立してあるわけですね。この町内ではあなたはどこの出身ですかいうことは聞きませんからね。

A町の部落産業である食肉・皮革は、明治期に入って本格化した。1905年に、広島畜産株式会社が創業され、その屠場がA町に開設された。1909年に、それが市営となった。1886年、松本某なる人物がA町に製革場を創業した[広島県立図書館,1986]。この時期を起点としてA町の食肉・皮革が発展していった(13)。市営屠場での成牛の屠殺頭数は、1894年に8,062頭、1910年に13,021頭、1920年に18,716頭と増加した[広島市議会,1983,p.324]。この結果、A町内に貧富の差が生じ、階層分化が進んだ(14)。

この地域が「細民の巣窟」などと呼ばれるいっぽう、（大正期には-引用者）四、五万円から数十万円の財産を有する一○人内外の「豪商」があらわれている[天野卓郎,1 984,p.250]。

明治期のA町の仕事として「職業ノ主ナルモノハ屠夫、革製造、獣肉行商、車夫、日雇稼、靴直シ、下駄の直、及雑商ナリ又副業トシテハ竹皮下駄麦桿真田ヲ営ムト雖概ネ下等ノ職業ナルカ故ニ随テ収入モ多カラス全戸数ノ三分ノ一強ニ所謂其日暮シノ細民ナリトス」と記す資料がある(15)。1923年/1934年時点の仕事として「製綿、足袋用甲馳、獣皮皮骨化製、缶詰、骨釦、鉄工、ボール紙、石油詰替、製氷、製材」ともある(16)。A町古老の聞き取りを収めた書には、戦前期の仕事としてこの他、大工、船乗り、馬喰等があった[広島県部落解放運動史刊行会,1973,]。
またA町の仕事は、軍隊との関わりが大きかった。軍隊の施設・事業の建設・土木関係の仕事だけでなく、革製品を納める、古靴が払い下げられる（リサイクル）、軍隊に新しい藁を納めて馬糞や藁（肥料）を引き取る[同書,1973,p.91]、糧秣支廠の屠場・缶詰（牛肉）関係・被服支廠の皮革関係の職人になる等があった(17)。

（A町は）軍都としての寄せ場いうんですか、軍部との関わりもありましょうし、市内のいろんな関わりもあるでしょうし、軍を支えるいろんな要員もいったでしょうし、それに関わって業者も入ってきた。食肉とか化成とか皮革とか(18)。

しかしＡ町の生活は厳しかった。Ａ町は貧民窟と呼ばれ、木賃宿もあった。当時の貧困と被差別の様子は、古老の聞き取りに綴られている[広島県部落解放運動史刊行会,1973]。軍隊の兵士に余った飯（残飯ではない）が払い下げられた[同書,p.102]。芸妓に身売りする女性もいた(19)。アメリカに出稼ぎに出る人もいた(20)。困窮してＡ町へ入った人々は、もともと生活資源をもたなかった。人々には不安定就労しか途がなく、失業や不況や事故に遭うとたちまち極貧状態に陥った。木賃宿を寄せ場として滞留する放浪者もいた[中国新聞社,1913.6.18]。1918年8月11日に、米価の暴騰に怒った困窮者らが米穀商に米の廉売を要求して詰め寄った。米騒動である。Ａ町でも800人が繰り出した[広島県立図書館,1986]。12日、騒動は全市で5,000人に膨れ上がった。騒動は13日に及び、騎兵・憲兵が出動し、Ａ町も包囲された。この出来事も、Ａ町住民の困窮を物語る一端である。

Ａ町住民はすでに1907年に、生活改善・困窮者救済のための自助組織「一致協会」を結成していた。そして米騒動を契機に1923年、県内の「きょうだい」とともに広島県水平社を結成した。住民の解放運動は、融和的な生活改善運動から訣別した(21)。

[4]近代Ｉ期の都市部落・Ａ町（の人口・仕事）の特徴は、次のように要約される。軍都広島の労働市場の拡大にともない、周辺の農村・小都市から人口が流入した。Ａ町に困窮者が入り滞留した。そして流入者は家族・姻戚・同郷者を呼び寄せた。またＡ町は、市内困窮者の環流点となった。かくしてＡ町が膨張した。

Ａ町の労働市場は2つの部分からなった。一つ、食肉・製靴・製革の部落産業である。これらは明治前期に本格化したが、おおむね事業体は零細で、経営は不安定で、周辺に多くの潜在的失業者を抱える形をとった。二つ、工夫・大工・人力車夫・雑商等の「都市雑業」である(22)。軍都としての都市改造・商都としての経済興隆は、膨大な労働力を需要し、Ａ町にその下層部分が集住した。Ａ町はいわば寄せ場の機能を果たした。

＜４＞近代Ⅱ期

[1]1945年−78年の「ヒロシマ」は、「平和都市」建設を掲げての戦災復興の時期であった。1944年に面積69.3km²、80,115世帯、336,383人を数えたが、原爆投下後の1945年には33,272世帯、137,197人に減った[広島市,1995,pp.18−19]。その後、人口が戻った。さらに1970年代の町村合併で、1978年には市域が675.1km²に広がり、315,435世帯、871,603人へ膨張した。1945年にすでに、市会に戦災復興委員会が設置され、戦災復興が始まった。爆心地・基町の第五師団跡地が市に開放され、東半分が「官公庁施設」に、西半分が「公園用地」とされた。1952年に、広島平和記念都市建設計画（建設省）ができ、平和記念公園、平和大通り等の中心部の都市改造指針が決まった。1953年、広島・呉臨海工業地帯総合開発計画ができ、工業都市としての離陸がめざされた。

[2]原爆で壊滅した戦後広島に、新たな都市下層が形成された。四散していた人々が無一文で市内に戻った。引揚者や新たな流入者が増えた。街頭に「浮浪者」や「原爆孤児」が起居し、市内全域に簡易住宅が建った。市内各所にスラムや闇市が出現した(23)。基町に応急住宅・引揚者住宅が建ち、困窮者が入居した。戦前すでに国が買収していた太田川河川敷に疎開先からの帰還者・引揚者・市内立退き者・韓国朝鮮人が流入した。結果、そこは巨大なスラムとなった。人口流入の原因は、河川敷が国有地のため占拠・居住しやすかった、都心に近く就労しやすかった、河川敷で空間的に密集居住ができたからである。爆心点の相生橋から三篠橋東詰の約1kmの相生通りは「原爆スラム」と呼ばれ、復興事業の土地区画整理による立退き者を含め、最大900戸（県都市計画課調べ）、1,135世帯が住んだ[山代巴,1965,p.2]。その内175世帯、約650人が韓国朝鮮人であった（西警察署基町派出所調べ）。このスラムが、1968年−78年の基町地区再開発事業とともに漸次縮小・消滅していく。

戦後広島で韓国朝鮮人の社会の新たな展開をみた。戦前に52,000人−53,000人といわれた朝鮮人の多くは、祖国解放とともに帰国した。在市の登録人口は、1950年4,634人[広島市,1951,p.13]、

1955年5,566人[広島市,1955,p.20]、 1960年6,182人[広島市,1961,p.18]、1965年−6,835人[広島市,1966,p.20]、1970年7,285人[広島市,1971a,p.31]と漸増していった(24)。次のような経緯で広島に留まる者も、少なくなかった[同書,pp.3−4]。

終戦直後、朝鮮に帰ろうと思い、家財道具一切を売り払って田舎から出てきた。ところが、輸送船が機雷にふれて沈没したという話をきき、しばらく様子をみることにした。三年間、江波町から南観音町と知合いの家を転々として帰国の日を待った。・・呉一家も、遂に帰国をあきらめ、二十三年からこの相生通りに小屋を建てて住みついた。

韓国朝鮮人の集住地は、南観音をはじめ旧軍需工場の周辺地域（小家屋）、基町払い下げ地（簡易住宅）、太田川河川敷（簡易住宅）等であった。後に払い下げ地および河川敷の人々の多くは、立ち退いて公営アパートに入った。1949年、韓国朝鮮人の職業は無職2,672人、学生（学齢期の子ども）614人、土木484人、工員108人、古物商59人、労務者54人、仲仕50人、商業50人、運転手41人、飲食業27人、事務員26人、その他176人、不明24人、計4,386人であった[広島市,1950a,p.24]。人々の職業的地位の低さはあきらかである。

[3]被爆直前、A町人口は1,558世帯、6,037人、1,550戸であった[金崎是,1982,p.16]。原爆の犠牲は即死約600人、負傷者4,800人に及んだ（家屋全壊90%、半壊10%、家屋焼失70%）。A町住民は戦時中、疎開で頼れる先が少なく、約50戸が疎開しただけであった[同論文,p.17](25)。ゆえに爆心地からの距離（1.5km−2.5km）に比し、人的な被害（死亡・負傷）率が高かった。被爆後約50%が太田川河川敷に留まり、残り50%は半年以内にA町へ戻った。ここにも、A町住民が疎開先に存分に頼れない（被差別の）事情があった。その後河川敷に疎開者・引揚者・困窮者・朝鮮人が流入し、人口が膨張した。1951年に4,203人[広島市,1952,p.26]、1959年に9,149人[大橋薫他,1991,p.93](26)、1971年に8,118人[広島市,1971b](27)、1975年に8,644人[ふくしま文庫,1992,p.36]であった。1950年代、原爆で減った人口がたちまちに急増した。

戦後、A町の地形と景観が変貌した。1932年に始まり1944年に中断していた太田川改修工事は、1951年に再開された。立ち退き住民の居住権・生活権を求めた熾烈な闘いが起きた。そして工事は、1954年に完工した。1960年−62年、平和大通り延長建設および都市区画整理事業が、これに続いた。このなかで立ち退き住民は一部町外へ出て、他の人々は公営・公団のアパートに入居した。

もともと生活資源が乏しい上に原爆で壊滅したA町で、生活再建は容易でなかった。最大の困難は、軍需関係の仕事が消滅したことであった。A町は戦後ふたたび、広島の都市下層として出発した。1950年に、調査対象者2,039人の職業は、靴関係17.5%、食肉関係10.6%、物品販売・飲食業18.1%、事務・店員15.7%、工員・技術者7.5%、公務員・自由業5.9%、自由・日雇労働者8.9%、その他・失業者8.1%、無職者7.6%であった[広島市,1950b](28)。靴・食肉関係の部落産業の仕事に就く者（物品販売・飲食業も含めて）が28.1%、事務・店員、工員・技術、公務・自由業の被雇用者が29.1%、自由・日雇、失業・無職が24.6%であった（このなかの事務・店員・工員は、おおむね零細な事業所、公務員は現業職であった）。すなわち大部分の職種が、低位で不安定な仕事であった。失業対策事業就労（以下、失対）登録者は、1953年に684人[記念誌編集部,1974,p.43]、1957年に747人に及んだ[ふくしま文庫,1992,p.24]。これは、A町稼働人口の40%に相当したという。1950年、生活保護の被保護・要保護世帯は16.9%で、これは市全体の5.0倍であった[大橋薫他,1991,p.173]。

1967年に、調査対象者2,059人（世帯主）の職業は、皮革関係6.7%、食肉関係9.0%、物品販売・サービス業8.4%、経営・事務・工員・看護婦20.2%、公務・自由業8.6%、運輸関係4.5%、失対・単純軽作業21.3%、その他・無職17.1%、不明4.2%であった[広島市,1984,p.329]。部落産業（食肉・靴・皮革販売やサービス業を含め）が15.7%、被雇用者が33.3%、失対・無職が38.4%である。分類が異なり、また景気変動が影響するので厳密な比較はできないが、1950年と比べて、部落産業関係の仕事が減り、失対・無職が増え、次いで被雇用者が増えた。すなわち部落産業が

縮小し、その分、失対・無職の不安定層と被雇用層に分化した。1970年代には、この過程がさらに進行した。大手の機械製靴・合成靴が進出して製靴業が衰退し、和牛が減少し輸入肉・加工肉が進出して食肉産業が縮小した(29)。これらの職人・徒弟は、製靴・皮革および食肉関係の産業を見限り、工場労働者・日雇い・現業職等に転職していった。

[4]近代Ⅱ期の都市部落・A町（の人口・仕事）の特徴は、次のように要約される。原爆で一旦外に出た人々は、まもなく戻った。そこへ引揚者・市内困窮者・立退き者・韓国朝鮮人の流入が重なった。人口は膨張し、太田川河川敷に簡易住宅が密集した。そして太田川改修・都市区画整理とともに、簡易住宅がクリアランスされ、人々は町外に出るかアパートに入居していった。

広島は、戦災復興とともに商工業都市として再興した。しかしA町は、元来部落産業以外に資源をもたず、そこへ多くの人々が入るなか、零細商工業の従業員、失対、日雇い、失業者・半失業者が滞留するに至った。その後1970年代、製靴業が衰退し、食肉産業が縮少した。その結果、職人・徒弟が減り、現業職・日雇い・生活保護に転職していった。他方、広島経済が離陸するにともない、建設土木・製造業を中心とする被雇用層が漸増していった。いずれも人々は、戦後都市の労働市場の下層部分に組み込まれた。A町は、これらの人々のプールとなった。

＜5＞近代Ⅲ期

[1]1978年に基町再開発事業が完了し、広島は広域経済都市および「国際都市」をめざす「ひろしま」に衣替えした。1980年に、広島は政令指定都市になった。1985年には737.0km²、384,082世帯で、人口は1,038,198人に達した[広島市,1995,p.19]。この時期、まず都市再開発が進んだ。1994年のアジア大会も誘因となり、都心再開発・郊外再開発・交通体系整備等の大型公共工事が行われた。県外から労働者が流入し、建設・土木の労働市場が拡大した(30)。次に、広島経済圏が広域化した。高速自動車道（中国道、山陽道、浜田道）が整備され、広島新空港が開港した。通勤圏が広がった(31)。最後に、建設・土木業の膨張とともに、広島の産業構造がサービス経済化した。産業別就労者比で、1970年に、第二次産業34.5%、第三次産業60.2%であった[広島市,1993a,p.11]。1980年に、第二次29.7%、第三次67.3%であった[同書,p.11]。1990年に、第二次28.7%、第三次68.7%であった。第二次産業比は減少し、第三次産業比は増加した[同書,p.11]。とくに卸・小売・飲食、サービス業、金融・不動産等の業種の増加が目立つ。経済のサービス化は新たな職種を創出した。そして一方で少数の専門職、他方で多数の不安定就労層という、新たな階級・階層分化を生んだ[サッセン,1992,pp.198-201]。

[2]近代Ⅲ期、広島の都市下層も変貌しつつある。大型公共工事の波が収束し、建設・土木の労働市場が縮小し、その一部が都市下層に沈殿した。また経済のサービス化にともなう不安定就労層の下層部分が、都市下層に沈殿した。広島駅・通称「ドン」（大須賀町）・宇品港職業安定所前の日雇労働者の寄せ場が縮小した。「ドン」で毎朝平均40人−50人の日雇労働者が集まる[西日本越冬実行委員会交流会,1991,p.49]。これが、アジア大会景気の頃は200人−300人が集まった。また野宿者が、広島駅界隈・中央公園界隈・平和公園界隈に可視化した。景気や季節による変動は大きいが、その数、市内平均で40人−50人という[同書,p.41]。広島で、日雇労働者や野宿者等の流動的な下層民はまだ多くない。しかし経済停滞及び経済構造の変容のなか、この数は確実に増えている。

広島市の韓国朝鮮人（登録者）は、1994年に9,725人で、近年微減傾向にある(32)。在広外国人に占める韓国朝鮮人の比率は、低下している。それは1992年に70.4%、1993年に67.2%、1994年に67.1%であった[広島市,1993b,p.29][広島市,1995,p.29]。韓国朝鮮人の集住地域は、西区（南観音町、A町）、中区（基町）を中心に市内に点在する。A町で、韓国朝鮮人の人口比率は全町人口の12%という(33)。は、いずれの地域も韓国朝鮮人の在広島の史的経緯を背景にもつ。韓国朝鮮人の職業等に関する資料は入手できておらず、あれこれの情報から全体像を推測するしかない(34)。韓国朝鮮人の仕事は、建設・土木業、飲食業、販売、サービス業が多い。零細な事業所が多く、

就労条件は厳しい。韓国朝鮮人はおおむね、親族・知人の「同胞」ネットワークを介して就労する。家族・親族従業員、臨時雇い・日雇いと不安定な就労状態にある者が多い。また韓国朝鮮人のなかで、階層分化が進行しつつある。その底辺部分が都市下層に位置する。

近年、広島に新来外国人が増えている。都市の国際化現象である。「韓国人または朝鮮人」を除く外国人登録人口は、1992年に4,237人、1993年に4,794人、1994年に4,765人であった[広島市,1993b,p.29][広島市1995,p29]。この他、未登録の外国人が多数いる。登録人口の内、アジア・南アメリカ出身者の大半が新来外国人である。中でも中国人・ブラジル人・フィリピン人が多い。在広島の新来外国人の法的地位・仕事等に関する資料を入手できておらず、あれこれの情報から全体像を推測するしかない。中国人に学生、ブラジル人に企業研修生・出稼ぎ者、フィリピン人にエンターティナーが多い。東京や大阪の新来外国人調査によれば、新来外国人のエスニシティが多様化し、仕事が多様化し、エスニック集団レベルで階層化し、また個人レベルの仕事・生活で階層化しつつある(35)。新来外国人の底辺は、未熟練・不安定の作業員・工員・店員や日雇労働者が位置づく。近年、東京では公園等で野宿する新来外国人も現れている。人口規模は小さいとはいえ、広島の新来外国人の動向も、全国の趨勢に照応してはいまいか。野宿する外国人の報告はないが、不安定就労の作業員・工員・店員・日雇労働者は多い。新来外国人としての被差別の立場ゆえ、都市下層に属する外国人は少なくない。

[3]現在のＡ町の様子はどうであろうか。以下報告書[広島市,1988]および[広島市,1993a]に依って、Ａ町の全体像（の一端）を描く。ただし煩雑になるので、逐一の注記は省く。Ａ町の世帯・人口は1985年に2,221世帯、5,879人、1990年に2,030世帯、4,976人であった。近年のＡ町の人口動態について、次の特徴が指摘される。1985年−1990年に、まず人口が減った。次に人口は15歳未満および30歳代で以上減り、60歳代以上で増えた。世帯構成では一人世帯率が36.3%で、4.6%の増加である。ここに若年層の減少・高齢層の増加という人口の二分化傾向が指摘される。別資料によれば、1980年−1986年にＡ町に転入した人3,222人の内、65.1%がＡ町を含む西区内からの転入であった[ふくしま文庫,1992,pp.223-225]。同じくＡ町から転出した人3,689人の内、68.7%が西区内への転出であった。すなわち若年層を中心とした人口移動は、西区内という近接空間での移動でしかない。ここに、人口移動を空間的に制約する差別の構造がある。ちなみにＡ町の混住率は、1990年に26.3%とされる[広島市,1991,p.13](36)。Ａ町在住の韓国朝鮮人が12%というから(33)、非対象（つまり非出身）の日本人は、じつに14%余ということになる。人口の流動性が高いＡ町において、非出身者人口の率がいかに低いかが分かる。ここに今日なお広島で、Ａ町を被差別部落の町として空間的に凝離する力と過程を見る。

Ａ町で1985年−1990年に、就労状態にある人が微減し、非労働力が微増した。これは人口の高齢化に対応する。完全失業率は2.0%減って3.2%である。率は近代Ⅱ期より大きく減った。しかしそれでも市全体の2倍以上である。次の就労実態から推して、半失業率も高いものと推測される。産業別の就労では、1990年、建設業13.5%、製造業11.2%、卸・小売・飲食業36.2%、サービス業24.5%であった。1985年に比べ、サービス業が増加した(+3.8%)。市全体に比べ、卸・小売・飲食業の率が高く(+8.6%)、製造業の率が低い(−6.0%)。サービス業の比率は、市の平均に等しい。Ａ町住民の就労は第三次産業に傾斜している。なお公務員が2.1%いるが、ほとんど現業職である。職業別の就労では、1985年、専門・管理職8.1%、事務職14.7%、運輸・通信職8.5%、技能・労務職36.3%であった。市全体に比べ、専門・管理職が8.9%、事務職が7.3%低く、運輸・通信職が4.2%、技能・労務職が9.3%高かった。現場の仕事の割合が高く、職業階層の低位性はあきらかである。また専門・管理職、事務職も、それらの中身が検討されなければならない。

Ａ町住民の生活水準は、一般に低位であるといわれる。本稿で住民の所得・消費水準を知る資料をもたない。行政はそれらの資料を公開していない。わずかに完全失業率が高いこと、就労条件が不安定であること、生活保護率が高いこと等の事実から、生活水準の低位性を推測する他ない。Ａ町の完全失業率は市平均の約2倍で、生活保護状況は1982年-1987年の年平均で220.2世帯、350.8人であった[ふくしま文庫,1992,p.225]。保護率は1988年に60.4‰で、市平均の約8培の高率であった。

[4]近代Ⅲ期の都市部落・Ａ町（の人口・仕事）の特徴は、次のように要約される。Ａ町人口の流出入は大きい。1980年−1986年に年平均460.3人が流入し、527.0人が流出した(37)。Ａ町への流入には、外へ出ていて戻った人やその縁者が含まれる。その多くは近接空間での移動である。

Ａ町は広島社会の下層の人口環流の結節点である。Ａ町には建設・土木、サービス関係の臨時・日雇い仕事がある。安い貸間やアパートがある。下町的なコミュニティがある。かくして市内から生活困窮者や不安定就労者が参入しやすい。「傷病」「その他」のケースの生活保護世帯の10%は、外からの転入者である[ふくしま文庫,1992,p.226]。またＡ町は外国人が多い。韓国朝鮮人が多い。これに新来外国人が加わる。中国人・韓国人・フィリピン人・ブラジル人。この人々がＡ町へ入る経緯も、上と同じである。

Ａ町から流出する人々には、まず若年層がいる。Ａ町住民の持ち家・一戸建て率は26.5%である。後は公営・公団・民営のアパート暮らしである。ゆえに若い世代が世帯分離する時、家を出るしかない。流出先の多くが西区内であることは、上にみた。かくしてＡ町に高齢層が滞留し、一人世帯が増える。次に、生活水準が上位・中位の富裕層や余裕層がＡ町を出る(38)。この場合、家を新築する土地空間がないという事情のみならず、町を出たいという心情も働いている。

Ａ町住民の就労には、次のような特徴がある。まず部落産業が労働力需要の役をほとんど果たしていない。製靴・皮革業は現役の靴職人2人を除いて、ほぼ消滅した(39)。食肉関係は市営の食肉中央卸売市場の職人が43人で、その他食肉加工業者およびその従業員、焼き肉店まで含めた食肉販売関係の仕事に従事する(40)。しかしその数も、以前より縮小した。次に近代Ⅱ期に中心的な役を果たしていた失業対策事業が終息した。生活保護の比重も、なお率が高いとはいえ低下した。最後に、卸・小売・飲食業への就労の比重が増加した。これは零細な流通・サービス分野の事業体（特に食肉関係）が多いＡ町の実態を反映するのみならず、広島のサービス経済化に照応する現象でもある。

以上のような就労の特徴のもと、Ａ町で階層分化が進行する。町から若年層・富裕層が出て、高齢層が残り、そこへ不安定就労層・外国人が入る。広島の下層人口の環流の結節点としてのＡ町の位置が、なお機能している。

＜６＞都市部落の位置

本稿は「近代と都市部落」の主題のもと、Ａ町を事例に都市部落の近代史を俯瞰した。記述は近代を3期に分け、広島および都市下層の枠組みのもとで、Ａ町の人口・就労の構造を見た。近代広島の展開にみるＡ町の位置は、次のように要約される。

1. Ａ町は、農村困窮者→戦災困窮者→下層困窮者と、人口の流動する下層部分を受容し　てきた。参入が容易な仕事群と安い居住条件の存在がそれを可能とした。労働市場の底　辺を担う新たな活力ある人口の受容は、Ａ町および都市広島の活性源をなしてきた。
2. Ａ町は、都市人口の下層部分の社会移動の濾過機能を果たしてきた。Ａ町は、周辺農　村・都市（の被差別部落）から流入する人々の空間的な濾過機能を果たした。また広島　の他地域から流入する人々の階層的な濾過機能を果たした。
3. Ａ町住民は、部落産業・都市雑業→失対・建設土木・日雇い→販売・サービス・労務　と、都市の下層労働の中心部分を担ってきた。そして高い失業率と生活保護率を引き受　けてきた。
4. Ａ町は、軍需→建設土木→労務と、都市広島の労働力需要の調節機能を果たしてきた。　Ａ町は、過剰労働力や退役労働力のプールとなってきた。日雇い・失業・生活保護が、　これら縁辺労働力の常態であった。
5. Ａ町は近代Ⅰ期に、遍在する貧民窟の核の一つをなした。近代Ⅱ期に、被爆による壊　滅から都市部落として蘇生した。近代Ⅲ期に、都市経済の離陸のなか、なお都市下層と　して凝離・島化しつつある。

すなわちＡ町は、近代Ⅰ期−Ⅲ期を通じて、時代ごとに形を変えながらも都市下層に位置づいてきた。近代Ⅲ期に、Ａ町の生活水準が底上げされ、生活保護受給の極貧世帯が減った。しかしＡ町全体とし

て都市下層に留まっている。
　ところでこの史的経緯、すなわちＡ町を可視的に（近代Ⅰ期、Ⅱ期）また不可視的に（近代Ⅲ期）、都市下層へと凝離してきた都市の構造圧力のなかにこそ、部落差別の現実がある。近代都市の形成に始まり脱産業都市に至る経緯のなか、Ａ町を市域の中心（交通至便にして就労・居住の一等地）にあってなお周縁に追いやってきた都市の無言の意思こそ、構造としての部落差別にほかならない。

　本稿は、都市下層の近代史研究の一つとして、近代都市の形成と展開における都市部落の変遷をみた。そして、そこに自己撞着する近代都市の階級性と差別性を読んだ。本稿は、都市部落および都市下層の近代史研究の序にすぎない。また筆者のＡ町研究の序にすぎない。仮説の構成と検証の実質は、この先にある。

(1)　ゆえに「都市下層」を構成する下位範疇は、時代と社会によって異なる。また中根は、 寄せ場労働者の概念規定のなかで、「都市下層」の要件として「被差別性」を掲げてい る[中根光敏,1997,pp.170]。
(2)　本稿でいう「Ａ町」は通称であり、今日、そこには行政区として4町が含まれる。
(3)　以下、面積・世帯・人口については同書から。18−19頁
(4)　木賃宿の分布は1927年に、東警察署管内24軒、西警察署管内30軒、宇品警察署管内 7軒であった。西警察署管内には、本稿の対象地・Ａ町が含まれる。
(5)　広島社会事業協会の資料は[広島市議会,1983]からの重引による。当時、記者たちの スタンスは「変装」して未知の「異界」（貧民窟、木賃宿）を「探検」するという距離 にあった。
(6)　国勢調査による。このなかに広島市に住んだ韓国朝鮮人が多く含まれる。
(7)　広島県朝鮮人被爆者協議会が被爆者の証言をもとに行った調査結果である。1939年、 韓国朝鮮人の日本への強制連行が始まった。その結果、1940年代、朝鮮人が激増した。
(8)　1907年、地区名が川添村からＡ町へ変更された。
(9)　当時は被差別部落の「赤裸々な」実態描写が、なんの配慮もなく新聞に掲載される時 代であった。
(10)　『芸藩通志』に、幕末期に川田村（現Ａ町）に930人いたとある[広島市,1972,p.205]
(11)　Ａ町在住Ｂさん(72歳)の話（以下、年齢はすべて面接時点のもの）。1993年2月5日。「本通り」の世帯数は、当時から今日まで65世帯で変わらないという。この世帯および 周辺農家の人々がＡ町の先住者をなす。
(12)　前掲Ｂさんの話。1993年2月5日。このようなＡ町形成の経緯ゆえに、住民には「来住者」「仮住まい」意識が強いという。1895年、広島県にコレラが大発生して市内で1,302人が死亡した[広島市,1989,p.263]。この時、死体処理の仕事で広島県東部（備後地方）から来てＡ町に住み着いた人々がいたという[Ａ町在住Ｃさん（86歳）の話。1991年1月23日]。たしかに、筆者の情報でも Ａ町に県東部に出自をもつ人が少なくない。
(13)　いずれも年代は、次の書からとった[広島県立図書館,1986]。
(14)　1916年、ロシアから14万足の編上靴の注文があり、大阪の2工場の外、Ａ町にも工場 を設置してこの製造にあたるとある[芸備日日新聞社,1916.9.10]。またこの時、さらに 別の15万足の注文もあった。
(15)　「広島県地方団体及慈善団体事績概要」『近代部落史資料集成』第5巻所収 [ふくし ま文庫,1992,p.36]より重引
(16)　広島県工場懇話会「工場法適用工場一覧」 [ふくしま文庫,1992,p.59]より重引
(17)　糧秣支廠にも屠場があり、軍用缶詰が作られた[広島市,1972,p.423]。大正期、市内 に20人を越える缶詰業者がいた[同書,p.431]。この仕事にＡ町住民が関わった。
(18)　前掲Ｂさんの話。1993年2月5日
(19)　前掲Ｃさんの話。1991年1月23日。Ａ町を出る時、一旦隣町に籍を移してそこから娼 妓にな

る娘がいたという。同じ話は新聞にもある[中国新聞社,1913.8.17]。当時のＡ町　に対する差別の厳しさが忍ばれる。
(20)　前掲Ｃさんの話。1991年1月23日
(21)　Ａ町は戦前・戦後（の一時期）を通じて広島の部落解放運動の拠点（の一つ）であっ　た。差別は厳しく、住民の闘いは激しかった。優れた指導者も多く輩出した。今日なお、　Ａ町（住民）の心性にこの誇りの歴史を深く留めている。今、人々は組織を再興し、そ　の闘いを継承しつつある。
(22)　隅谷は、「小工業や零細家内工業の労働者、小売商、サービス業の従業者、職人等の　手伝、土建その他の人足、日雇等々」で、近代的賃労働関係とは異なる家父長制や擬制　的親分子分関係等に支配された生業に就く者を（都市）「雑業層」と呼んだ[隅谷三喜　男,1967,p.63-64]。
(23)　闇市（自由市場）は、現在のＪＲ広島駅・横川駅・西広島駅の周辺、宇品、天満のも　のが大きかった[広島市,1947,p.29]。1946年1月に商店230店だったものが、その年12月　には2,000店に膨れ上がった。
(24)　1949年の政令第381号による登録証明書発行を受けた者につき、とある。
(25)　別資料では、調査人員の内、被爆後移転した人115人、移転しなかった人1,218人、不　明78人とある[広島市,1984,p.293]。移転しなかった人が86.3%に及ぶ。
(26)　[大橋薫他,1991,p.166]より重引
(27)　[大橋薫他,1991,p.166]より重引
(28)　[大橋薫他,1991,p.172]より重引
(29)　Ａ町在住Ｄさん（53歳）の話。1992年12月3日
(30)　1991年3月、広島新交通システム工事で架橋中の橋げたが落下し、14人が死亡する事　故があった。アジア大会関連の施設・道路の建設ラッシュのなか、労災事故が急増した　[中国新聞社,1991.9.7]。
(31)　高速自動車道の整備により山口県・島根県・鳥取県から広島の建設・土木工事に日帰　りで通うことが可能となった。農閑期の農民は、それまでは出稼ぎ形態であった。早朝　の高速道のドライブ・インは、マイクロバスで広島へ向かう農民の朝食風景で賑わう。
(32)　ただし、このなかに登録をした新来の韓国朝鮮人も含まれる。
(33)　前掲Ｂさんの話。1993年2月5日
(34)　次の書に、丸山孝一による南観音の韓国朝鮮人の集住地区の人口移動・家族・生活・　文化の詳細なモノグラフがある[広島市,1983,pp.302-390]。
(35)　都市の新来外国人に関する最新の研究に、次の書がある。[広田康生,1997][奥田道大,1997]
(36)　混住率とは（全人口－対象人口）÷全体人口×100で算出された。この算出方法には　批判もある。
(37)　次の書に掲載されている表から算出した[ふくしま文庫,1992,p.221]。
(38)　前掲Ｃさんの話。1985年10月18日。
(39)　Ａ町在住Ｅさん(76歳）の話。1995年8月2日。Ｅさん兄弟が現役の靴職人である。
(40)　Ａ町在住Ｆさん(67歳）の話。1996年1月22日

＊本稿を一部とするＡ町研究に協力いただいたＡ町の方々に謝意を表する。

【参照文献】
天野卓郎,1984,『大正デモクラシーと民衆運動』 雄山閣
有元正雄・天野卓郎・甲斐英男・頼祺一,1983,『広島県の百年』山川出版社
馬原鉄男,1974,『日本資本主義と部落問題』　部落問題研究所
馬原鉄男,1982,「日本都市下層社会研究覚書」『部落問題研究』74号　部落問題研究所
大串夏身,1980,『近代被差別部落史研究』　明石書店
大橋薫・八木佐市・林雅孝,1991,『戦後広島の都市診断』ミネルヴァ書房

奥田道大,1997,『都市エスニシティの社会学　民族/文化/共生の意味を問う』ミネルヴァ書房
金崎是,1982.8,「被爆者の生活と救援運動」 部落問題研究所『部落』422号
記念誌編集部,1974,『西部復興土地区画整理事業（第二工区）誌』
芸備日日新聞社,1916.9.10,「製靴業者の活躍　露国大注文其他」『芸備日日新聞』
芸備日日新聞社,1918.6.28,「飢えた貧民　千六百九十九人」『芸備日日新聞』
在日本大韓民国居留民団広島県地方本部,1984,『広島民団35年史』
サッセン・サスキア（森田桐郎他訳）,1992,『労働と資本の国際移動』 岩波書店
杉原薫・玉井金五,1986,『大正/大阪/スラム　もうひとつの日本近代史』 新評論
隅谷三喜男,1967,『日本の労働問題』
中国新聞社,1913.6.14,「梅雨期の貧民窟　雨に泣く悲惨な一廓」(1-4),『中国新聞』
中国新聞社,1913.6.18,「社会暗黒面の探検　木賃宿通信＝福島町より」(1-3),『中国新聞』
中国新聞社,1913.8.7,「三篠より娼妓志願」『中国新聞』
中国新聞社,1991.9.7,「ア大会控え建設労災が急増」『中国新聞』
中川清,1985,『日本の都市下層』 勁草書房
中根光敏,1997,『社会学者は２度ベルを鳴らす』 松籟社
西日本越冬実行委員会交流会,1991,「西日本越冬活動報告」 日本寄せ場学会『寄せ場』 第5号
日本中国友好協会広島支部,1990,『軍都ひろしま　旧軍事施設めぐり』
橋本敬一,1986,「芸備の被差別部落」 後藤陽一・小林茂編『近世中国被差別部落史』 明石書店
広島県朝鮮人被爆者協議会,1979,『白いチョゴリの被爆者』 労働旬報社
広島県立図書館,1986,『広島県部落問題年表　広島県立図書館　所蔵資料にみる部落問題』広島県部落解放運動史刊行会,1973,『広島県水平運動の人びと』　部落問題研究所
広島市,1947,『市政要覧　昭和21年版』
広島市,1950a,『市政要覧　昭和24年版』
広島市,1950b,『広島市における部落調査』
広島市,1951,『市政要覧　昭和25年版』
広島市,1952,『市政要覧　昭和26年版』
広島市,1956,『市政要覧　昭和30年版』
広島市,1961,『市政要覧　昭和35年版』
広島市,1966,『市政要覧　昭和40年版』
広島市,1971a,『市政要覧　昭和45年版』
広島市,1971b,『広島市隣保館要覧』
広島市,1972,『広島市史』第4巻
広島市,1983,『広島新史　都市文化編』
広島市,1984,『広島新史　歴史編』
広島市,1988,『昭和60年　国勢調査結果報告書』
広島市,1989,『図説広島市史』
広島市,1991,『同和対策の概要』
広島市,1993a,『平成2年　国勢調査結果報告書』
広島市,1993b,『第15回　広島市統計書　平成5年度版』
広島市,1995,『第16回　広島市統計書　平成6年度版』
広島市議会,1983,『広島市議会史　統計資料編』
広島市議会,1986,『広島市議会史　社会資料編』
広島社会事業協会,1927.2.5, 変装記者「市内木賃宿化け込み探検記」『社会時報』6-2
広島社会事業協会,1928.1.1, 無料宿泊所主・下田広次郎「広島無料宿泊所の古い日誌の中から（一）」『社会時報』7-1
広島社会事業協会,1929.1.1, 藤川天洋「広島市に於ける貧乏原因の実地踏査報告」『会時報』8-1

広田康生,1997,『エスニシティと都市』 有信堂
ふくしま文庫,1992,『地域民主主義を問い続けて　水平社70年と広島のたたかい』部落問題研究所
福原宏幸,1986,「都市部落住民の労働＝生活過程　西浜地区を中心に」 杉原・玉井　前掲書
山代巴,1965,『この世界の片隅で』　岩波書店